

# 「少子化対策」でなく、 ざっくばらんな話として

やまぐち たけし  
山口 健

●自動車総連・副事務局長

「日本の将来を考えるなら、結婚することの重要性をしっかりと表現すべきでないでしょうか。」

「そんな内容を加えたら、若い人達が報告書そのものに、そっぽを向いてしまう。」

これは、私がある研究会の最終報告書のとりまとめの議論の際、有名な大学の教授と交わしたやりとりです。

もちろん、前者が私で後者が教授ですが、先生が分厚い報告書の中に結婚を促す表現をほんの数行記載することを躊躇されたのに対し、私が感じたことを2つの観点から書きたいと思います。

一つ目は、「若い世代に率直に意見を述べることを避けていないか」、ということ。

私が学生だった頃を思い返すと、義務教育中は、男の先生は生徒を呼び捨てにするのが当たり前で、悪さをすれば容赦なく愛のムチが飛んできました。

大学では、ヘルメットにサングラスとマスク（手ぬぐい？）がユニフォームの学生も多く、講義の内容は、先生の個性で極左から極右まで様々。学生がどう思うかでなく、「興味がある者だけ聞いていればよい」「単位が欲しければ理解しなさい」のように、主体は先生にあるのが当たり前だったと思います。

そんな中、私の経験の一つですが、当時何やらカッコいい響きをする「グローバルスタンダード」という考え方が広がり始めたことに対し「日本の強みを削ぎ落とす欧米諸国の策略」と力説されるユニークな教授の講義を通じて、モノを多面的に見る事の重要性を感じた記憶があります。

ひるがえって現在、私より年上の先生が入学したばかりの小学一年生の息子を「山口さん」と呼ばれることに違和感は覚えつつも時代の流れと納得した私ですが、一方で、大学の先生に限らず、発展途上の若い世代の人たちに、考えを語らなくなっている自分に対して反省を覚え

たのですが、皆さんはいかがでしょう？

二つ目は、表だって結婚を促すことが難しくなっていること。

正直、この話を職場ですることは、同性間ではまだしも異性に対しては、「セクハラ」という言葉がちらついて遠慮する方が相当多いと思います。

晩婚だった私は、親や上司や先輩から「早く結婚しろ」「相手はいないのか」といったことを散々言われました。その都度、「ほっといて」と反発はしていたものの、そうした声掛けが継続してあったからこそ、一人に慣れてしまっていたモテない私が、結婚をあきらめなかったような気がします。

結婚した後、さすがに具体的には書けないのでご想像にお任せしますが、私のような男が家庭を築くことは簡単では無く、妻には負担をかけ続け、悲しい思いをさせてきました。面と向かっては言えないのでこの機会に書き残しておきますが、夫として失格だと思うと同時に、妻には心から感謝しています。

そんな私が偉そうには言えませんが、「夫婦にとって大事なものは役割分担ではなく支えあうこと」、「理屈でなく本能として子供は愛おしい」等々、結婚しないと実感出来ないことは山ほどあります。

『結婚はいいもの』と青臭く主張したいと思いますが、皆さんはどう思われますか？さすがに妻には聞けませんが。

そんなこんなで、日々の職場の雑談の中で、もっと結婚に関する話題が増えることを願う今日この頃です。

ただ、自分から話に出す以上は責任が生じますので、結婚したいと思っている後輩や部下には、嫌がられてもお相手の紹介をお願いします。

私も次男が成人式を迎える65歳まで働き続ける限り、紹介活動も続けます。「早く結婚した方がいいよ」との反省を踏まえて。